

# 新人ナース

とまらぬ僕と  
右手が



著：姫ノ宮レイ

画：さくやついたち

原作：Waffle

**OB** オトナ文庫



## 目次

序章	004
第一章 なんでもしてあげたいの	006
第二章 スッキリしたいでしょ？	037
第三章 お背中流してあげる	065
第四章 初めてだけど	090
第五章 私が見ていてあげる	119
第六章 大好きだから	146
第七章 最後の入院生活	189
終章	252

### 愛乃みさき

事故にあつて入院したのをきっかけに再会した、かつの憧れの先輩。学生時代は園芸部員で、現在は楠木大学付属病院に勤める新人ナース。清楚で優しく思いやりのある性格。



# 第一章 なんでもしてあげたいの

なんでこんなことになってるんだらう。  
僕はいま、病院のベッドで、憧れの「愛乃みさき」先輩に、イキリたったオチンチンを  
つめられている……。

「すごい、大きいね……」

先輩の吐息が、オチンチンに当たり、ゾクリとする。

僕は、生唾を飲み込んだ。

「いい？ 触るよ？」

先輩はそう言って、僕のオチンチンにゆつくりと手を伸ばす。

そして、

「あうっ！」

思わず、声が漏れる。

みさき先輩のすべらかな手に触れた瞬間、ビクンと僕の男根が跳ねた。

(こんな……先輩の手に触れられているだけで、イツ、イツちゃいそうだよ！)

「いくよ？ 痛かったら、言ってね？」

恥ずかしそうに手を動かし始める先輩。  
(ああ、ダメだ！ こんなの！)  
なんで……なんで、こんなことに……。  
先輩の手に扱かれる僕の亀頭の先から  
は、もう先走り汁がどっぷりと溢れだし  
てしまっていた……。

※ ※ ※

それは、初出勤の朝。大学を卒業し、  
なんとか就職も決まった、春。

下ろしたてのスーツを身にまとい、会  
社に向かう途中のことだった。

「あれ、この香り……」

通勤途中にある、大きな病院の前を通  
り過ぎようとしたときだ。

懐かしい花の香りに惹かれ、僕は、立  
ち止まった。



僕はこの香りをよく知っている。憧れのあの人が好きだった、サクラソウの香り。その香りに惹かれ、僕は香りがやってくる方向を見やる。そこで……僕の目は、釘付けになった。

「次の検診は一ヶ月後ですから、忘れないでくださいね」

「ええ、本当に、お世話様でした」

「お大事に」

病院前で、退院するのであろう患者さんと、それを見送っているナースの女性。

そのナースの女性の姿が、あまりにもそっくりだったから。

僕の大好きな、憧れの先輩の姿に……。

「あ……」

違う。そっくりとか、そういうことじゃない。

あれは……あの人は……。

「みさき、先輩……」

口にした僕に、彼女が視線を向ける。

目が合った。

僕と彼女の目が、引き寄せられるようにぴたりと合い、そしてふたりとも、言葉を失った。

ああ、間違いない……あれは、僕の大好きだった——いや、いまでも一番大切に思っ

ている、初恋の人。「愛乃みさき」先輩。

僕はなにも言えず、ただみさき先輩を見つめた。

目を離れたそのスキに、消えていなくなってしまうようで。

あのときの、ように……。

しかし、

「——くん！」

きつと僕の名前だろう。みさき先輩が、なにかを叫んだ。

同時に、切り裂くような歪いびな音が、先輩の叫びをかき消した。

それは、唸るような車のエンジン音。

「みさき先輩！」

次の瞬間、僕は駆け出していった。

先輩の後ろから迫るふらふらと蛇行した車の姿に戦慄を覚えながら。

「危ないっ!!」

叫んだその瞬間、僕の世界は、反転した。

※ ※ ※

僕がみさき先輩に出会ったのは、学園に入学してまもなくのことだった——。

入学してすぐ、この学園の生徒は部活動が必須だということを知った。運動が得意なわけでもない。これといった入りたい部があるわけでもない。そんな僕が、アテもなく学園内を徘徊していたときのことだ。

(なんだろう、この香り?)

不思議な、甘い香り。なぜだか、とても懐かしい……。

そんな香りを辿ったその先に、そこはあった。

「園芸部？」

古ぼけた木札に書かれた文字を口にする。

園芸になんて、興味があったわけではない。

でも、部室の中から漂う香りに誘われて、部屋の中を覗き込むと――、\*

そこにあった一面の桜々と、ひとりの女性の姿に、目を奪われることになった。

ただ、きれいだって、そう思った。

咲き誇る花も、だけど、それ以上に……風に揺れる柔らかい髪、その横顔に、僕の目は釘付けになっていた。

どれだけの時間、そうしていただろう。

なにも口にせず、ただその彼女の横顔を見つめていた。

「……？」

立ちつくした僕の存在に、その人はようやく気づいて、目を丸くした。

ドキドキした。

その人と目が合うだけで、僕の心臓は自分でも信じられないくらいにバクバクと高鳴った。

この音、聞こえちゃうんじゃないんだろうかっていうぐらいに。

「新入生？ もしかして見学かな？」

……そんなわけないか」

おどけて笑う、その人。

透き通るような可憐な声に、僕の鼓動はますます高まった。

「どう、したの……？」

僕がずっと無言で立ちつくしているから、その人は不思議そうにしている。

なにか、言わなくちゃ……。

これじゃ僕、すごく変なヤツみたいだ。

「あ、あの……それって、なんていう花ですか？」



僕の絞り出した声に、その人は、優しく微笑んだ。それが、みさき先輩との、出会いだった。

※ ※ ※

「——ようぶ？ しつかり！」

暗闇の中、僕を呼ぶ声がある。

深いまどろみの中、その声に誘われて、まぶたを開ける。

「ああ、よかった……気がついたのね？」

ぼんやりと、開けた視界に映ったのは、懐かしい微笑み。

「みさき、先、輩……」

「よかった……ああ、よかったわ！」

先輩、どうして泣いてるの？

僕は、いったい？

「先輩……僕……」

身体を起こそうとする僕。

しかし、身体がずっしりと重くて、上体を起こすことは叶わなかった。

「あつ、ダメ。まだ、動かないで？ そのまま、じっとしててね？」

みさき先輩が、泣きそうな顔で制止する。

「僕、どうして……ここ、は……？」

声を振り絞った僕に、みさき先輩は悲しそうな目をした。

「ここは、楠木大学付属病院。あなたはね、事故にあって、入院しているの」

みさき先輩に言われた刹那、頭の中に映像が浮かぶ。

近づく車のエンジン音。そして、直後、鳴り響くスリップ音。

そうか……僕はあのとき、先輩をかばって、それで……。

「いつつ！」

「あ、ダメ！ まだ動かないでって言うてるのに！」

身体を動かしてみようと力を入れただけで、途端に脚部に痛みが走る。

「しばらくは安静にしてて？ 無理に動こうとしなければ、大丈夫だから」

みさき先輩が言うには、しばらくすれば痛みは引いて、大きな力を入れようとしなければ、大きな問題はない状態にはなるらしい。それでも、絶対安静、ということらしいけど。

「不便なこともあると思うけど、あなたのお世話は、全部私がするから。してほしいことがあったら、なんでも言っつてね？」

「そんな……」

「ううん、いいの。あなたがこんなことになってしまったのも、私のせいだし……」

みさき先輩は、悲しそうに顔を伏せる。

「そんな、そんなことない！ みさき先輩のせいだなんて！」  
思わず僕は叫んだ。

みさき先輩は、まったく悪くない。だって、突っ込んできたのは、あっちのほうなんだし……。

「そうね……ごめん、言い方が悪かったかな。私が、してあげたいの。助けてくれて、本当にありがとう」

「先輩……」

「もう、そんな顔しないで？」

先輩は、しかめっ面の僕を和ませようとしてか、優しく微笑んでくれる。

「先輩……本当の看護師さんみたい」

ふいにそんな言葉が漏れる。

「みたいじゃないなくて、本当の看護師さんなんだから。ちゃんとわかってる？」

「そっか……そうだよね……」

みさき先輩は、この病院の看護師さんで。僕は、みさき先輩をかばって車にはねられ、ここに入院して。いきなりこんなことになって、いまいち実感がないけれど、そういうことなんだ。

「……私じゃ、この服は似合わない？」

まだ意識のぼんやりする僕に、みさき先輩はおどけて笑う。

「いや、そういうわけじゃないんだけど」

そりゃこの病院にいるわけだし、ナース服を着てるし、当たり前のことなんだけど。あまりにも急な出来事が重なりすぎてしまって、認識が追いつかない。

「わかったら、この病院では看護師である私の言うことを聞くように。いいですね？」

「なんだか、変な感じ」

僕が釈然としない表情をしていると、先輩は困ったように眉をひそめた。

「もう。私って、そんなに威厳ないかな？」

※ ※ ※

そんなこんなで、僕は入院患者となってしまった。

初出勤当日に事故にあっってしまうなんて、なんと不幸なことか……。

でも、幸福もあった。

一番の心配であった就職先の会社からは、咎められるどころか褒められ、退院後の仕事についてはまったく心配しなくてもいいという、ありがたいお言葉。

みさき先輩や病院側が、会社に上手いこと言ってくれたらしい。

入院費も、すべて相手側の車の運転手が補償してくれるので、心配なし。

僕には立派すぎるこの個室も、病院勤務の看護師の命を救ってくれた恩人にと、特別に

用意してくれたらしい。

「調子はどうかな？ これ、ここに飾っておくね」

病室を訪れたみさき先輩がもってきてくれたのは、小さな花瓶に入ったお花。

「みさき先輩、それって？」

「このお花？」

僕は、その花をみさき先輩が持ってきてくれたことに、強い違和感を覚えた。

「みさき先輩、切花、嫌いだったでしょ？」

僕の言葉に、みさき先輩は、ああ、と納得したような顔をした。

それは一年生の夏の頃だった。まだ卒業後の進路が決まっていないうみさき先輩に、僕はこんなふうに行ったことがある。

『先輩だったら、お花屋さんとか、園芸に関わる仕事をしたいんじゃないかって、勝手に思ってしまった』

そんな安直な発想の僕に、みさき先輩は困ったようにはにかんでいた。

『切花は可哀想で……お花屋さんとかは、ちよつとね。それに、お仕事にしちゃったら、お花や植物に対して、ただ純粹に好きって気持ちだけじゃ、いられないだろうから……』

だから、先輩が切花を持ってくるなんて、意外だった。

きつと、病室に置く花だから、鉢植えってわけにはいかなかったんだらうけど……。

「ふふ、安心して。これ、造花だから」

「あっ」

本当だ。ベッドからだと遠いからわからなかったけど、よく見ると、でも、

「みさき先輩にもらえるんだったら、やっぱり生花がいいです。鉢植えだと、『根付く』なんて、そんなの僕は気にしませんから」

「そうは言っても……ね？」

「サクラソウがいいです。みさき先輩の、一番好きな花……」

みさき先輩と初めて出会ったとき、咲き誇っていた、あの「サクラソウ」。

みさき先輩は、僕のわがままに、困った顔をしていたけれど、

「ね、みさき先輩？ 約束ですよ」

僕がそう念を押すと、

「そうね……わかった」

最後には、そう微笑んでくれた。

「どう、痛みはだいぶ引いた？」

「うん」

みさき先輩の言葉に僕は頷く。

「それじゃ、しつかり食べてね。そしたらお薬の時間だから」

僕の目の前には、先輩が運んできてくれた美味しそうな病院食。

スプーンを手にした先輩は、ごく自然に食事をすくうと、

「はい、あ〜〜ん」

僕の口元に、スプーンの先を向ける。

(こんなにも素敵な看護師さんが、つきつきりで看病してくれるっていうんだから)

事故直後の数日間、少しでも力むと全身に痛みが走り、痺れて動けなかった。

でも、いまは無理に力を入れたり、動こうとしなければ、問題は無い。

そりゃあ、走りまわったり、何事も無い日常を過ごすことはまだ無理だけど、先輩のおかげで、僕の入院生活に大きな不都合はなかった。

「あ、あの…先輩。それ、そろそろやめませんか？」

「それ？」

「その…自分で食べられますから」

手はなんの不自由なく動くのだから、わざわざ「あ〜ん」までしてもらう必要はない。なのになぜか、入院初日からいままですつと、食事の際はこうしてみさき先輩が世話してくれる。

みさき先輩は、僕の意見に考えるようなそぶりは見せるが、それだけ。答えはいつも決まっている。

「私が、してあげたいんだから、いいの」

そう言われると、僕は断り切れない。

みさき先輩には、学生時代からこういう強情なところがある。

こうなってしまったみさき先輩を、僕は一度も止められた試しはない。

※ ※ ※

食事だけでない。なにからなまでに、みさき先輩は僕の入院生活をサポートしてくれた。上体を起こせる状態にまでなんとか回復した僕は、この日、みさき先輩に身体を拭いてもらっていた。

「どうしたの？」

「いや、あ、あの…」

吐息が触れるほどの距離までみさき先輩に近寄られ、思わず身を引いてしまう僕。

ベッドに乗り出した体勢で、僕に接近するみさき先輩。その大きな胸がよけい強調され、服はパツンパツンに張り詰めている。

ナース服の下に着たブラジャーが、うっすらと透けて見えている。スカートだって、まくられて白い太ももが丸見えだし、もうすぐ見えてはいけないものまで見えてしまいうようなほどきわどい体勢。

(いくらなんでも、この距離は……!)

みさき先輩の全身が発する心地良い匂いが、僕の鼻孔をくすぐり——心臓が、張り裂けそうなほどに高鳴っていた。

「……?」

先輩が不思議そうに僕の顔を覗き込むと、さらに顔が近づき、僕はたまらなく緊張してしまっていた。

「もう、どうしたの? ほら、服を脱いで……」

みさき先輩の細い指先が、僕の上着のボタンにかけられ——、

「あ、ちよつと、先輩っ!」

「ちよつと、じゃないでしょ? それ脱いでもらわないと、身体、拭けないんだから」

ボタンがひとつひとつ、みさき先輩の手によって、丁寧に外されていく。

「わっ、汗びっしょり」

はだけて露わになった僕の胸元に、みさき先輩は驚きの声を上げた。

そこはみさき先輩との必要以上の接近による緊張で、驚くほど汗ばんでいた。

「いや、これは……」

「我慢してたの? ダメでしょ? ほら。私に任せて?」

みるみるうちに、みさき先輩は僕の上着のボタンをすべて外してしまった。

そしてみさき先輩は、手にした濡れたタオルで、さらけ出された僕の上半身を丁寧に拭き

取っていく。

「どう、気持ちいい?」

「は、はい……」

「もう、すっかり大人の男の人の身体……」

僕の身体をすみずみまで拭きながら、先輩はうつとりした視線でつぶやいた。

「この身体が、私を守ってくれたんだね……」

そう言って、みさき先輩は突然——、

「っ?! せ、センバ——」

みさき先輩は、僕の裸の上半身を抱きしめた。

「ありがとう……」

頭を僕の胸にあずけたまま、みさき先輩はぼそりと言った。

その大きな胸の感触が、温かさが、はつきりと伝わってくる。

みさき先輩の髪から、成熟した大人の女性の匂いが、僕の脳に溶け込んで痴情を煽った。

(あ——)

と同時に、僕の鼻孔をくすぐる、とろけるような甘い匂い。甘い甘い、イチゴ味のキャンデーの匂い。それは、僕がよく知る、みさき先輩の匂いだった。

よく覚えている。みさき先輩とはじめて出会ったあの日——、

『ねっ、これ、あげる』

子供のようにおどけた顔で、みさき先輩がポケットから取り出したのは、水玉模様の包み紙にくるまれたキャンディ。

みさき先輩には、口元が寂しくなると、ポケットに忍ばせたキャンディをこっそりと食べるという、ちよつと子どもっぽいクセがあった。

僕は、差し出されたキャンディの中から、ピンクのイチゴ味のキャンディを手に取る。

『あ、気が合うね。私も、イチゴ味が一番のお気に入りなの』

無邪気に笑う、そんなみさき先輩のちよつと変わったところも、僕は大好きだった。

『飴、食べる？』

みさき先輩はなにかあるとそうやってキャンディをくれた。

そのたびに、僕はイチゴ味を選ぶ。

僕にとつては、それがみさき先輩との繋がりだったのかもしれない。

みさき先輩は、どうだっただろうか？ 僕が、ただイチゴ味を好きだけだというぐらいに思っていただろうか。

ひとつだけ、僕が知っていることといえば――、

みさき先輩が、イチゴ味のキャンディだけは、かならず欠かさず、ポケットに忍ばせていたということ。

僕の自宅の机には、みさき先輩にもらったイチゴ味のキャンディの水玉模様の包み紙が、

いまでもこっそりと仕舞われている……。

(ああ、ダメだ！ ダメなんだけど……！)

みさき先輩との思い出に浸りながらも、僕の性器は、すっかり勃起してしまっていた。

「えっ……？」

違和感にみさき先輩もすぐに気づいた。

「きゃっ」

ちいさく可憐な声を上げて、みさき先輩は飛び退く。

その見開かれた視線は、僕の張り詰めた股間、ただ一点に注がれていた。頬を真っ赤に染めながらも、みさき先輩はそこから目を逸らせずにいる。

「あの、その……先輩……」

こんなとき、なんとと言って弁解したらいいかなんて、僕にはわからない。

そんな僕に、

「そだよね……男の子、だもんね？」

先輩は、そうつぶやいた。

「なんで気づかなかったんだろう……ごめんね？」

そんな、みさき先輩が謝る必要のないのに……。

みさき先輩は、またしばらく黙り込んで、なにやら考えた後、言った。

「抜いて、あげよつか？」

「ええ!!」

「言っただけでしょう？ 私、あなたのために、なんでもしてあげたいの!」

言うのと、みさき先輩は僕をベッドに押し倒した。

「せ、先輩……!?!」

「大丈夫……言っただけでしょ？ 私に、任せて……」

先輩はおもむろに口をあんぐりと開き、その口内からピンク色の可愛らしい舌をちよんと突き出す。そして、その舌尖は、僕の露わになった乳首へと――、

「あっ!」

みさき先輩の舌が僕の乳輪に触れた瞬間、全身にゾクゾクとした快感が走り抜ける。

「あん……すごい、ぴくぴくって……んっ、れろ……」

（ああ、みさき先輩が体を拭きながら、乳首を舐めてくれるなんて……! こんな……!）

「ピチャ、レロ、レロ……乳首舐めながら、こうひて身体を綺麗にしてあげてるの、気持ちひい?」

「ああっ、ダメだよ、先輩!」

「なにがダメなの？ 気持ち、いいんでしょ?」

「そ、それは……はううっ!」

みさき先輩に乳首を舐められ、僕はベッドの上でくねくねと身体を振らせる。

「ん……ピチャ……ピチャピチャ……」

「んはあっ!」

思わず声が漏れた。

（ああ! 舐め方、どんどん激しくなってる! みさき先輩もどんどん興奮してきているんだ……）

「はあはあ……乳首、すごく硬くなってる……気持ちいいのね? レロン、ちゅう、ピチャ……んぢゅぶ……」

みさき先輩も、僕の反応を見て、頬が紅潮していく。

ガラガラして生温かなみさき先輩の舌が乳首をレロンと舐め上げるたびに、痺れるような気持ちよさが乳首から全身に広がっていく。しかも――、

「ちゅば、れじゅ、レロン……あっ! オチンチン、また大きくなった……」

「ううっ!」

放置されたチンポを観察されているとなると、僕の恥ずかしさもさらに増していく。

「み、みさき先輩?」

「レロン、ちゅば……なあに?」

僕の乳首を舐めながら、首をかしげるみさき先輩の、なんと扇情的なことか。



「すぐく、気持ち、いいです……」

「ちゅう、レロン……ふふっ」

僕の言葉に、嬉しそうにみさき先輩は微笑む。

（ああ、みさき先輩の笑顔、可愛い……先輩みたいな女性に乳首を舐めてもらえるなんて、僕……！）

こんなの、いけないことなのかもしれない。でも、憧れのみさき先輩に責められるその快楽に抗えず、身を委ねてしまっている僕がいる。

「あっ、ああっ！」

「私の舌れ、感じてくれへ……顔、そんなに真っ赤にひて……可愛い……れる……」

愛おしそうに僕のことを見て、先輩も艶めかしく身体をくねり出してきた。

ナース服の擦れる音が艶めかしく、僕

の興奮を誘う。

「もつといやらしく責めてあげる。気持ちよくなって？ ふたりだけの内緒、だよ？ ちゅば、れろん……」

（ああ、なんて色っぽい目で見つめるんだ……！ そんなに恥ずかしそうに、でも色っぽく見つめられたら、もう、理性が……！）

「ピチャ、ちゅば、れろん……れろれる、ちゅめるる！」

「ああっ、みさき先輩！」

乳首をレロレロと舐められ、僕はビクンと身体を仰け反らせ、のたうち悶える。

「ちゅう、ちゅば、レロレロ……ああ、いやらしい、お、オチンチン……こんなに硬くなっちゃうて……」

みさき先輩が僕の張りつめた股間を見て、口にする。

「みさき先輩、だめ！ 僕、ゾクゾクして……あああ、恥ずかしいよ！」

「私も……んっ、れる……私も、すごく恥ずかしい……」

わかっている。みさき先輩の恥ずかしそうな顔が、声が、とてもエッチだ。

もつと聞きたい。もつと見たい。いやらしいこと、恥ずかしそうに言ってくれるみさき先輩を。でも、そんなこと……。

「はあはあ。な、なんだか私まで、すごくエッチな気分……んんう……」

みさき先輩がゴクリと唾を飲み込む。

「ど、どうしてほしいの？ ねえ、私にどうしてもらいたい？」

みさき先輩、めちやくちや興奮してきたみたいだ。

声がうわずつて、淫らな気配がどんどん滲み出してきて……。

「して、あげる。あなたがしてほしいこと、私、してあげたいんだもん……」

先輩が必死にお姉さんぶっているように見えるのは、気のせいだろうか？

そんな先輩も、たまらなく可愛くて。あああ、どうにかなってしまいたい……。

「み、みさき先輩！」

たまらなくなつて、僕は情けない声を上げて、みさき先輩にねだるような視線を向けた。さつきから、腰がずつと浮き上がりっぱなしで、張り詰めた男性器がいま以上の行為を要求している。

そんな僕を見て、みさき先輩は優しく微笑み、すべてを理解してくれていた。

「大丈夫、任せて。いやらしく腫れあがったオチンチン、念入りに拭いてあげるから……」

……

「あつ……」

「ほら、こうやって巻き付けてするんでしょう？」

先輩が、温かいタオルで僕の男根を包み込む。

「んああっ……！！」

ああ、ガラガラヌメヌメしたタオルが、舐めるみたいに龟头を……。

「気持ちいいの？ 可愛い……背すじ、仰け反ってるよ！」

「みさき先輩、恥ずかしい……でも、オチンチン温かくて、気持ちよくて、ああ……」

「私も……一緒に、恥ずかしいことしよう？ もっと、恥ずかしいこと……」

（もっと、恥ずかしいこと!? そ、それって……）

「涎……いっぱいオチンチンにつけながら、タオルでこすってあげるね？」

「ええっ!？」

（みさき先輩、なんて大胆なことを！）

「涎、いっぱいつけちゃうね？ あなたの勃起したオチンチンに……勃起チンチンに、涎を……ん、んはあ……」

みさき先輩は濡れたタオルを僕の竿に巻き付けると、露出された龟头を見下ろし、あんぐりと口を開ける。すると、みさき先輩の涎が、僕の龟头の先にたたりと落ちてきて、

「あああ！」

龟头の先にみさき先輩の涎が触れた途端、ゾクリとした快感が僕を襲う。

「んっ……どうしたの？ 涎かけられて、気持ちよかった？ そんなに腰を浮かせて……」

お尻の穴、窄まっちゃってるね？」

「ううっ、みさき先輩！ そんな恥ずかしいこと、言わないで……！！」

「あんっ。でも、恥ずかしいこと言われて、感じちゃってる？ いいよ、気持ちいいことなんでもしてあげるから……恥ずかしがらないで？」

言いながら、みさき先輩は僕のオチンチンを濡れタオルごと扱じきはじめる。

「ああ、感じる……オチンチン、すぐく、感じるよ……」

みさき先輩の涎が潤滑油となり、僕の男根が扱じかれていく。

男根に垂らされた大量の涎は、タオルにも染み込み切らず、ぬめりとした粘着性の刺激が、僕のオチンチンを刺激する。

「オチンチン……はあ……オチンチン、気持ちいい？ 亀頭の裏側を集中的にこすられると、どう？」

「ああっ！」

（ううっ、亀頭がタオルのざらざらした感触で刺激されて！ これ、いい！）

「それとも、ここを……竿をこうやってしこしこされるのがいいのかな？」

「あ、ああっ……！」

続いて先輩は、サオの部分を、さらに熱烈に扱じきたてる。

「はあはあ……サオ……オチンチンのサオ……ほら、扱じいてるよ、見て……はあはあ……」

「あああっ……！」

（ああ、気持ちいい！ 亀頭を念入りにしこしこ擦こって、サオをぎゅっつと握にぎって、思いきり皮を上下に擦こってる！）

「ああ、気持ちいい！ とろけちゃうよ、みさき先輩！」

僕は身を振る、悶もえた。

「可愛い顔してよがってる……オチンチン扱じかれて、子供みたいに甘えて……」

そんな僕を見て、色っぽく先輩が微笑ほむ。

先輩にそんなことを言われたら、もっ

ともっと甘えたくなってしまう。

「み、みさき先輩……ああっ！」

（いけない！ 先走り汁が、ドロツと尿

口から！）

「あっ！」

先輩も、僕の亀頭の前から飛び出た透

明な汁に、驚きの声を上げた。

「クスッ……これなにかな？」

笑みを浮かべながら、先輩は指の先で、

亀頭にお漏らしした先走り汁をネチヨネ

チヨと弄もり回し――、

「あううっ……みさき先輩……そ、そ

れ……たまんない……」



「フフ……我慢汁、オチンチンの先からお漏らしして……んっ、れるっ……それを舐められて、よがってるの?」

「ああっ! そ、そうなんだ……あんまり気持ちよすぎて……また、漏れちゃう!」  
オチンチンがビクリと跳ね上がり、また亀頭の先から先走り汁がニユプリと漏れ出してくる。

「お願い! もっとして、みさき先輩っ! 僕……ああっ、気持ちいいっ!」

「そんなに駄々っ子みたいにおねだりして……ああ、可愛くて……いっぱい、こすこすっとしてあげるからね?」

先輩は、僕のオチンチンを一心不乱に扱き続ける。

「オチンチン、もう限界までばんばんになってる。はあ、何倍も亀頭が膨らんで……」

みさき先輩は顔を真っ赤に染め、お姉さんぶった態度で、オチンチンを見つめている。

「みさき先輩、もっと! もっとオチンチン扱いて! 激しく扱きながら……!」

「はあはあ……こう? ねえ、こう!」

「ああっ……!」

僕のリクエストを受けて、先輩の手の動きがさらに激しさを増す。

(は、激しい!)

強烈な酸味が口の中いっぱい広がる。

「みさき先輩、出ちゃう! いやらしいカウパー、ぬるんぬるんになって出ちゃうう!」

「見えるよっ! ああ、出てる。本当に出てる。ドロドロのカウパー、こんなにいっぱいっ!」

「みさき先輩、たまらないよ。そ、そんなに擦られたら……ああ! ダメっ!」

カウパーだけでなく、もっと大きな奔流が、僕のオチンチンの中から湧き上がってきている。射精は、間近だった。

「ああんっ! で、出るのっ? 出ちゃうのっ?! オチンチン、ビクビクして……ああっ!」

「い、イクう! 先ばあいつ!」

情けなく叫んだその瞬間だ。

ビュクッ! ビュクビュクッ! ビュクッ!

「あ、んああああっ! で、でちゃった! すご……いっぱいっ! あはあ……」  
僕は、真っ白な白濁精子を、吐き出してしまっていた。

金玉が収縮を繰り返し、オチンチンの先からドクドクと精子が溢れだしていく。  
憧れのみさき先輩の手を、僕の精液が汚していく。

「身体、ヒクヒクして……ああっ、この匂い……これが、男の人の……。いっぱい、出たね?」

ひくつきながら射精し続ける陰茎を、うっとりとみさき先輩が見つめている。

(そんなに見られたら、恥ずかしくって、僕……)  
ビクンッ! と男根が跳ねる。

「えっ!? やだ……まだ、こんなに硬くて……嘘? す、すごい……」  
 先輩、呆れる……あんなにも大量に射精しておきながら、僕の男性器はまだまだ勃起したまま。自分でも、信じられない。

「んっ……はぁ……いっぱい、汚れちゃったね?」

グロテスクに光る僕のオチンチンをうっとり見つめて、みさき先輩が呟く。  
 「後始末も、ちゃんとしてあげるからね……」

「あっ」

病室に備え付けのボックスティッシュに手を伸ばしたみさき先輩。  
 でも、ちょうどティッシュは切らしてしまっているところだった。

「……ティッシュ、もうないね。今日はこれで我慢して?」

濡れたオルで、僕のオチンチンを丁寧<sup>ていねい</sup>に拭いていくみさき先輩。

「痛かったら、言ってみてね?」

「だ、大丈夫です……っ!」

イッたばかりの性器はとでも敏感で……ブルツと身を震わせると、尿道に残った精子が、亀頭の先からニユプリと押し出される。

「あっ……! まだ、出てくるの? すごい……全部、搾りとってあげるね? パンツ、汚れちゃうもんね?」

先輩は優しくオチンチンを根元から扱きあげ、僕の残滓<sup>ごみ</sup>をタオルで拭きとっていった。

「やっぱり、ティッシュのほうがいいかな? 綺麗に、拭き取りきれない……次のときに、また持つてくるからね?」

(次のとき? みさき先輩と、また……これからも、こんなことが?)

そう思うと、ビクビクッ! とまた男根が震える。

「あんっ! オチンチン、ビクビクさせないで? うまく、拭けないよ……」

先輩の手の中で暴れる、いまだイキリたつたままのオチンチンに、みさき先輩が困ったような声を出す。

あああ、みさき先輩……困った顔も、可愛い。

やがて僕のオチンチンを綺麗に拭き終えると、息をついて先輩が言った。

「……はい、きれいになった」

「あ、ありがとう」

「また、溜まったら私に言ってみてね? 絶対、約束だから」

「せ、先輩……」

それって……入院中、ずっと、みさき先輩がこんなことをしてくれてること?

みさき先輩に誘われたら、僕はきつとまた、みさき先輩とエッチなことをしてしまうだろう。抗える自信は、正直ない。

だって今日、ハッキリとわかってしまった。

(僕はまだ、こんなにもみさき先輩のことが――)

先輩は、僕のこと、どう思っているんだろう？  
わからない。ただの後輩？ それとも……。

「ね？ 約束……」

みさき先輩の瞳が、まっすぐに僕を見つめる。

ずるい、ずるいよ。みさき先輩にそんな目で見つめられたら、僕は、なにも言えなくなってしまう。

胸が熱い。ドキドキが、止まらない。

ああ、いったいどうなってしまうんだ……。僕の、入院生活……。

この続きが気になる方は、  
5月19日発売の書籍版をご購入のうえ、  
お楽しみください。

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©REI HIMENOMIYA ©Waffle

Printed in Japan 2017

OB-073